

巻  
の  
ほり  
橙  
橙  
橙  
橙

作者さんや読み手さんの声は  
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

でんきゆう

カチカチツ

え？いや、怖いわけじゃないですよ、うん。

それじゃ、おやすみ。

：

カチツ

—や、え、ちよつと、もどしてつてば、いやだから怖いわけじゃないですつてなんていうかちよつとだけ落ち着かないというか何というかこう昔からこうやって寝ていたから慣れてないから安らかに寝るときにちよつとしたノイズもとい違和感になるというかというだけで決して別に全然全くもつて真つ暗だとお化けとか妖怪とか魑魅魍魎とかエクトプラズマとか物の怪とか怪異の類が出てくるような気がして怖くて身体がガクガク震えてしまつて眠るどころじゃなくなるからではないんですとにかくさつさと橙色の明かりに戻しなさいつてばストコドッコイ

：

ごめんなさいごめんなさい本当は怖いんですお願い、頼むから元に戻して

カチカチカチツ

—ありがと。

…なにニヤニヤしてるのよ。ほら、笑ってないでさつさと寝るわよっ

空戦って格好良いよね

俺が空軍に入ったのは兄に憧れてだった。歳の離れた兄は若くして空軍のエースと呼ばれ、航空ショーでのデモフライトで他のどんな機よりも美しい曲線を空に描いていた。

進行方向を変えずに螺旋を描く機動。その華麗な真円を、自分でも描いてみたくなったのだ。

——凄いだろ？ あれは俺の得意技なんだ。

普段自分を誇ることの滅多に無い兄が、嬉しそうに語っていたのを良く覚えている。

そんな兄だが、敵国——そのころはまだ敵国じゃなかったが——の偵察任務中に失踪。従軍した俺は、手掛かりを掴むために兄の後を追うように功績を挙げ——いつの間にか兄と同じくエースと呼ばれる様にまでなっていた。

——交戦。向かい合って相対するは敵国のエ

ース。これまで何度か相手をしてきた、一種腐れ縁ともいえる相手だ。相対距離が減っていく。高度に差があるため、撃ち合いにはならない。交差。操縦桿を引き機首を上げ続ける。百八十度ひっくり返ったところで、今度は操縦桿を横に倒し機体を水平に戻す。今の動きで高度を上げつつ、敵の後ろを取れた。(インメルマンターンというらしい。昔軍の練習フライトを見て質問した俺に、兄が教えてくれた。) 敵に動きは無い。舐めているのか？ 加速。敵との距離を詰めていく。赤外線

誘導ミサイルを起動……ロックオン。ミサイル発射

白い円筒が敵を墜とさんと空を駆けていく。敵は

囷の熱源の橙色の炎を撒き散らしつつ垂直に上昇し回避。俺の放ったミサイルは囷を敵と誤認、敵のはるか後方に橙色の花を咲かせる。操縦桿を引き、翼を翻す。垂直上昇を続ける敵に追従。高度計の数値がどんどん増えていく。このまま二発目のミサイルを放とうとしたとき、嫌な予感が背筋を貫く。前方上空にいる敵が突如

失速、真横に反転し機首がこちらを向く。まずい、畏に嵌った。向こうから見たら何も考えずに突っ込んでくるこちらはいいのだ。さつき動きが無かったのはこれを誘っていたのか。ふと、かつて兄

が模擬戦で上官に墜とされた時に使われた機動だというのを思い出した。敵機が機銃を発砲。曳光弾の橙色の雨が降ってくる。ほとんど条件反射で操縦桿を倒し回避行動をとる。いくら俺が兄の後姿を追ってきたといっても、そこまで追うつもりは毛頭無い。コックピット内に怖気の走るような鈍い音が響く。敵は急降下しつつ、俺を嘲笑うかのように真横を飛び去っていった。被害を確認。右主翼先端付近に亀裂が入っている。燃料タンク、燃料漏れ、燃料を投棄、予備タンクに切り替え。エンジン、異常なし。各動作をチェック、

前後軸の回転に若干のぶれ。飛行に影響は無い。あれだけの隙を見せてこれだけの被害というのは奇跡だった。自分の運の良さに感謝。交戦を続行。敵を探す。レーダーに反応。視認でも確認。右後方に付きこちらを狙っている。態勢を立て直しているうちに下から回り込まれた様だ。ミサイ

ル警告。囷の熱源を撒き左急旋回。激しいGがかかり血液が下半身に集中、視界が暗くなるが下半身に力を入れて耐える。辛いが死ぬよりマシだ。真横で爆発が起きる。橙色の炎が機体を舐めるが、損傷は無し。ミサイルを回避したと思ったのもつかの間、敵機が後ろを取ったまま接近してくる。このまま敵の思い通りにはさせるか。操縦桿とラダーペダル、推力を巧みに操り、機体を舞わせる。俺の憧れの技を脳内に描き、実行に写す。毎日これだけは決して練習を欠かさなかった。

進行方向を変えずに螺旋を描く。螺旋分だけ長い距離を飛ぶため、相対的に相手より遅くなることが出来、運動エネルギーを損失することなく相手の飛び出しを誘うことが出来る——はずだった。何が起こった。後方を確認。俺と同じ、いや、俺よりはるかに優雅な、かつて航空ショーで見たままの華麗な真円が、そこにはあった。

何故兄が行方不明になったのか。何故兄が敵国に組しているのか。何故兄は今まで俺と闘ってきたのか。そのどれもが今はどうでもいい。——今はただ、あの憧れの兄と同じ空を飛ぶだけだ。この橙の花と雨の踊る空を。

思いは東海道線に乗せて！

「僕に君なんかいらないんだ。」

そう彼女に言うてから二ヶ月。あの時はひどいことを言ってしまったと思う。あのころ大学の卒業研究に追われていた僕は精神不安定でストレスがたまっていた。それでこんなに怒ってしまったが、諍いの原因は大学卒業後どう生活するかという僕にとつてはくだらないことだった。なんで、激怒してしまったのか。そう思うとけんか別れてしまったことが悔やまれた。

けんか別れしてから研究の方は拍車をかけるように忙しくなった。卒業研究の連日徹夜は当たり前。運がよくて終電に乗って帰れる程度。確かに研究の方は楽しくて充実していた。だけど、何か物足りなさを感じてならなかった。原因はわかっていた。彼女と別れてしまったことが心に残っているのだ。この物足りなさは研究に没頭しても埋めることはできなかった。

そんなある日のことだった。僕は東海道線に乗って帰るがこの日は運良く日の出ているうちに列車に乗ることができた。ステンレスに橙赤色と緑色のラインが通っている車両。色々な人々の思いを乗せてきた列車。この日は土曜だったので列車はあまり混んではいなかったが、座る席はあまりなかった。疲れていたのととりあえず空いている席を探した。たまたまボックスシートが空いていたのでそこに座ることにした。席を探した時はもはや意識はもうろうと

しており、座って寝ることしか考えていなかった。寝かけようとした時僕を呼ぶ声が聞こえた。聞き覚えのある声、それは彼女の声だった。ボックスシートの向かいにいたのだ。

「君なのか？」

と僕は驚いて聞き返した。

「この前は悪かった。忙しくてつい……」

「いいのよ。私の方も忙しくてつい怒ってしまったの！」

と彼女は素直に言うてくれた。何でもない建物の数々。それが車窓を流れるように見えた。本当は彼女に色々と言をしようと思ったけれど思いとどまった。こんな所で、話をするなんて周りにとつて厚かましいだろうと。

この時間帯の東海道線は近郊型の列車なので、止まる駅ごとに乗客は減っていく増えることはない。ボックスシートも僕ら二人だけになった。だんだんと田舎方面に列車は進んでいく。周りに人があまりいないことを確認して彼女に言った。

「実は僕……君がいないと……。頼む！こんな恥ずかしがりやだけど許してくれる？」

車両のモーター音が鳴り響く。彼女はゆっくりと首を縦に振った。僕は是非見せたいものがあると言つて彼女と一緒にそのまま東海道線に乗り続けることにした。

「次は根府川、根府川」

と車内アナウンスが響く。やがて、列車は減速して止まった。僕は彼女の手を取つて電車を降りた。東海道線が駅を離れていった。そこは山と夕焼けに染まった海そして心地よい秋風が僕らを歓迎していた。

## ガラスの少年

私が小学生の時のことである。

「おい、これ見ろよ。」

友達のが藤が持ってきたのは、いかにもおいしそうな食べごろのみかんだった。

「何でこんなの持ってんの？」

「職員室から、バクってきた。ちょっとこれでキャッチボールしようぜ。」

当時かなりやんちゃだった加藤は、こんなことは日常茶飯事だった。よく巻き添えを食って私も怒られてしまうこともしばしばあったが、特にこのあと予定があるわけでもないので暇つぶしにはいいかな、と一緒にキャッチボールを始めた。みかんでキャッチボールなど、その当時史上最恐といわれた六年生担任の柴山に見つかったら大目玉を食らうこと間違いなしだったが、そんなことは関係ない。校舎裏ということもあるし何よりそのころは楽しければそれでオールオーケーのガキンチョである。そんな心配は毛ほどせず、みかんキャッチボールの時間を楽しんでいた。

そんなこんなでキャッチボールを長く続けていると

「もう飽きたな。よし、俺のイチローばりの強肩でこのみかん潰してやる。」

そんなことを加藤が言い始めた。みかんも勿体ないし、そもそも潰す意味が分からなかったが、どうやら彼は肩の強さを自慢したいようだ。

「潰すって……、どうやって？」

すると加藤は自慢げに空き教室の窓の下、要はコンクリート部分を指差してこういった。

「このコンクリートのトコに投げつけてみかん破壊してやるよ。」

そう言うと、加藤は大きく振りかぶってみかんを投げた。

加藤は決して口だけでなく、私と同じ野球チームのエースを務めるほどの実力者である。私は野球部仕込みのその綺麗でかつ力強いフォームに見とれていた。大きなバックスイングの後、決して軽くはないその体重を見事ボールに、いやみかんに乗せきるその技術に、私は見慣れていたフォームとはいえ感心してしまう。彼のフォームは完璧だった。投げられたみかんはきれいな球道を維持して予定通りぶつかった。そう、すべては予定通り。ただ、ぶつかった先がコンクリートの遥か上、窓ガラスであること、そして破壊されたのはみかんでなく、窓ガラスであるということ以外は、宙を舞うみかん、五時に近い夕焼け、そして黄昏時の光を浴びて鮮やかに飛び散るガラスの破片。幻想的だった。

「全部夢ならなあ。」

加藤の呟きが寂しく響いた。こっちのセリフだよ。

教室の中はひどい状態。ただ見えるのは夕焼けと混ざってよりきれいなみかんの橙色。

「みかん……たべようか。」

「うん……」

そのみかんが人生の中で一番酸っぱかったのは言うまでもない。

## The Clockwork Orange

(屋上で)

「……………」(溜息)

「……………」(嘆息)

「美しいね」

「……………」なあ

「何だい？」

「君は、どうしてこんな色になるのだと思う？」

「？ 高校で習わなかったかい、光線の入射角が浅くなつて……」

「それは波長が580〜700nmの光が散乱することの説明だろう？ 僕が言いたいのはそういうことじゃない。いつたいぜんたい、なんでこんな色をしているのかってことさ」

「……『君を美しく照らすためさ』とでも言えばいいのか？ それとも『フライングスパゲッティモンスター様がそうお決めになつたのです』とか？」

「それも一つの答えだね。でも僕はそうは思わない」

「じゃあ、」

「僕は彼女が傲慢だからだと思う。だから僕はこの色を美しいとは思わない」

「お前、何言つて」

「夕陽は夜を告げるためにやってくる。ならばどうして、彼女を歓迎できる？」

「……………」

「夜は暗く、深く、そして恐ろしい。彼女はそれを毎日毎日、ありとあらゆるところに押し付けて廻るんだ」

「……それは、夕陽のせいなのか？ 暗くてこわいのは夜だろう？」

「もちろんそうさ。しかし彼女がいつも一

緒にいる夜のことを知らないと思うかい？  
そして我々が夜を恐れていることを。

夜は確かにこわいさ。けど彼は公平だ。彼は誰にとつても恐ろしい。僕は彼のそんなところが嫌いじゃない。

しかし僕が夕陽を嫌う理由も、まさにその公平さだ。彼女は誰に対してもあの輝かんなかりの笑顔を見せる。見せつけるんだ。彼女には自信がある。彼女は自分が公平であることを知っている。自分がだれよりも美しいことを知っている。だから陰に隠れたものを光の下に晒し出すような厚顔無恥な振舞いができるんだ。

彼女は知らない。劣つたもの、弱きものが、優れたもの、強きものに対峙したとき、どれだけみじめな気分になるかを。同情が人を殺しうるということを。人は誰かに見られることに耐えられないということ。

だから僕は夕陽を見ると叫びだしたい衝動に駆られるんだ。放つておいてくれ！ おまえのやさしさは傲慢に過ぎない！」

(日が没する)

「もう、暗くなってきたな」

「そうだね」

「しかし、お前がどれだけ嫌つても、陽は雲の上の存在だ。どうすることもできないんじゃないか」

「そうでもないさ。弱者には弱者なりの復讐の仕方がある」

「どんな？」

「言つたらう？ 美しいとは思わないって。賤民が選民になりたければ、こう思うしかないんだ。『あれはすつばいぶどうだ』……」

## 代々怠惰な橙のタイタンの話

遂に日本神話軍との戦争が始まった時、ギリシャ神話軍随一の横着で有名なタイタンは家で家族と雑談に耽っていた。ギリシャ神話軍の総帥ゼウスは、タイタンを戦場に投じるため、神殿に呼ぶようにヘルメスに命じた。

「そういえばゼウス様。タイタンは最近名前を変えましたよ。ええつと、なんだっけ？ だいたいだいたいタイタン？」

「ああ、そんなこともあったな。何でも良い、今すぐにあのナマケモノをよこせ！」

ヘルメスは丘の上のタイタン家を訪れた。

「タイタン殿、戦争が始まりました。ゼウス様もお怒りです、急いで神殿のゼウス様の所へ向かってください」

タイタンたちは、けだるそうに応じた。

「タイタンって誰っすか？ どのタイタンか分からないんでー、フルネームでお願いしまーっす」

「父タイタンもいまーす」

「祖父タイタンはわしじやー！」

「え、ええつとなんだっけ？ 代々大胆にも怠惰で平らな高台に佇む建物にて大抵対談している大腿が大体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝殿のことです！」

「はーいわかりましたー。今いきますよー」

タイタンたちは文字通り重い腰を上げながら答え、神殿に向かった。

「ゼウス様、只今参上しました、代々大胆にも怠惰で平らな高台に佇む建物にて大抵対談している大腿が大体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝でございます。

この代々大胆にも怠惰で平らな高台に佇む建物にて大抵対談している大腿が大体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝、ゼウス様に全てを捧げた身、なんなりとご命令下さいませ！」

「ええい、まどろっこしい！ タイタンよ、今すぐ戦争に加われ！」

「はて、タイタンとはどのタイタンのことでございます。父も祖父もタイタンでございます」

父タイタンがひょっこり顔を出して言った。

「わたくしのことでございますか？ ゼウス様」

祖父タイタンがぼっこりお腹を出して言った。

「わしのことか！ ゼウスのひよっこー！」

「お前らは引退しただろ！ ええつとなんだっけ？ 代々大胆にも怠惰で平らな高台に佇む建物にて大抵対談している大腿が大体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝、体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝、お前のことだ！ ええい、面倒な名前にするな！ それにお前はただのいち神であり大帝などではない！」

「いいえ、私が私たる唯一の名は代々大胆にも怠惰で平らな高台に佇む建物にて大抵対談している大腿が大体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝でございます。いくらゼウス様の命令といえどこの代々大胆にも怠惰で平らな高台に佇む建物にて大抵対談している大腿が大体橙かつ段々腹のタルタルソースの竜田揚げとダイダイが大好きだけどダイエツト中だよたんたんたぬきのタイタン大帝という名を変えるわけにはいきません」

そうこうしているうちに、戦場から陸軍元帥ハーデスが死んで帰ってきて言った。

「ゼウス様、全滅でございます」

こうしてタイタンは面倒な戦争を回避したのであった。

ある雨の日、用事のために裏道を通って近道をしようとしていたときだった。か細い鳴き声が聞こえてきたので上を見やると、一匹の白い子猫が桜の木から降りられなくなっていた。猫が下りようと枝をうろろうろするたびに首の鈴がなる。

その首の鈴には、見覚えがあった。

「あれ…？隣の家のミーちゃんだよな？この前いなくなっただって言う…」

数週間前、猫がいなくなつたと隣の家が大騒ぎになっていたのを思い出した。おそらく、今までもろくに何も食べていないはずだ。かなり衰弱しきっている。…次に通るときは、間違ひなく力尽きてあの木から落ちる。隣の家にはずいぶんとお世話になっていたことと、その猫がずいぶんと哀れに見えたことが重なって、僕は無意識のうちに荷物を地面に置き、木に手をかけていた。幸い、体力には自信がある。木はそれほど高くは無いらから登るのは容易であるだろう。

「チチチ…：ほら、おいで、降ろしてやるから…」

突然の僕の登場に、ミーちゃんは怯えて寧ろ枝の先端へとどんどん後ずさってしまった。もう声など出ないというのに、助けてほしいというかのようにしきりに口を開けて喉を鳴らそうとしていた。負けじと僕は腕を伸ばし、ミーちゃん的首輪に手をかけたとき…

「やああああああああ

アッ」

余計に僕から離れようとしたミーちゃんは、雨に濡れた桜の木から足を滑らせ、そのまま下へと落ちていった。落ちた先が丁度こぶ状の根の硬い部分であったこと、そしてあまりの衰弱により、もうミーちゃんはどこにもいなくなってしまった。親切のつもりだったとはいえ、ミーちゃんを殺したのは僕のような気がして怖くなり、僕は駆け足でその場を後にした。

そしてその桜は次の年、白い花をどこよりも満開につけていた。

「今度はちゃんと登ったね。」

言える資格もないその言葉を、

僕は心の片隅で思っている。

## 橙に染まる

「あー、楽しかったねー。一日があつという間！」

日が低くなり、横浜の町全体が赤みを帯び始める。缶ジュースを俺の分と美雪の分、二本買って、海辺の公園のベンチに座る。ゆったりした風で涼みながら、しばらく談笑していた。

少し前の記憶の中の美雪と、目の前にいる少女は、どこか違って見えた。一つ年下の美雪とは小さいころからの仲だった。親同士の関係もあり、少し前まではまるで兄妹の様によくこうして一緒に遊んだ。最近では会う機会も減っていたが、今日はこのあたりにおいしいケーキ屋さんがあるのとことで、一人じゃ入りにくいからと言って連れて来られた。まあお世辞抜きに本当に美味しかったからよしとしよう。

「ねえ、一輝くん」

そう呼ばれて美雪の方を向く。思っていたよりもずっと近い位置に、紅い日に綺麗に照らし出された美雪の顔があった。ずっと見てきたはずなのに、不覚にも、一瞬見とれてしまった。

「目、瞑ってくれる……?」

上目遣いでそう言われる。おねだりの時はいつもこんな上目遣いだっとなー、俺も俺でいつも断れずにいたっけ、そんなことを思いながら、やっぱり美雪の言いなりになっている俺がいた。

何をされるのか、無意識で分かっていたんだらう。けれど俺の理性は、美雪が違った雰囲気だったのは化粧をしたからとか、遅くなったから送って帰らなきゃなとか、無理やりに気を散らそうとしていた。暖かい空気が、顔に近づくのを感じた。

唇が、柔らかいもので塞がれる。それは、不思議な感覚。まるで時間が止まったかのように感じる。甘い香りがする。そして熱い。それ以外のことはすべて頭から吹き飛んでいた。

す、と離れてしまう。途端に、色々な感情が頭の中を駆け巡った。

「……もう目あけていいよ」

どうすればいい。まぶたを開くと、そこには美雪の顔が……無かった。

目の前には美雪の右手であんまんが差し出されていた。んん? あんまん? いま口をふさいでいたのは……。

「あはっ、どうしたの? そんな顔して。もしかしてあんまん好きじゃなかった? さっき中華街で買ったんだー」

なっ、おい! 図つたな!?

「あつれえ、もしかして何か勘違いした?」  
美雪、満面の笑みである。

正直になんて言える筈もなく。悔しさと自己嫌悪にまみれてだんまりを決め込んだ。黙りついでに受け取ったあんまんをかじる。さっき感じた熱さと柔らかさは、あんまんからは微塵も感じられなかった。冷めてるし、すでにちよつと硬い。

「……中華街行ってから結構経ってるよな」

「うん、そうだねー」

「……美雪、さっきのって本当は……!」  
「……、知らないっ!」

笑いながら駆け出す彼女を、追いかけて捕まえる。ばさばさあつ。近くにいた鳩たちが驚いて飛んでいく。飛び立つ後には二人だけが残される。

空は薄暗く、まだ紅く。彼女の頬も橙に染まる。

## 蜜柑

君も冬になれば、必ずと喋っていいほどに彼に出会えるだろう？ 橙色の皮に包まれた彼のことだよ。

こたつの上が定番だけどね、我が家には残念ながらもこたつがなかったから食卓の上だ。それでも家族が集まる場所には変わらないから、毎年冬になると必ず団欒の中心には彼がいた。

普段はお盆の上に十個くらい乗っているんだけど、なくなったら誰が寒い部屋に取りに行くかで揉めたりしてさ。

そうそう。お風呂に入れると体が温まるって話だったから、皮だって無駄にせずに乾燥させておいた。

お風呂の前に一つ。いつも通りの味をここで確かめておく。お風呂に入りながら一つ。体を温めながらゆっくり食べる。お風呂からあがったら一つ。火照った体に冷たさが気持ち良い。冬になれば食べてばかりだね。

そういえば今年の冬は初めて一人で過ごす冬になりそうだ。

# 橙色の実

「ねえ、守人さん。その実、ちようだい」  
また来た。

私は心の奥でため息をつく。ここ数日、この少女は毎日、私の前に現れては、飽きずに同じことを繰り返している。

私は、背後にそびえる巨木をちらりと見上げる。

橙色の実をたわわにつけ、葉の生い茂った一本の木。幹は大三人がかりでも腕を回せないほど太いが、その枝は実の重さで簡単に手が届くほどになっている。

齡十ほどの少女は、その木をじつとにらんだまま、繰り返し返す。

「その実、ちようだい」

「だめだよ」

私は、いつもと同じセリフを述べる。

「これは神さまの実なんだ。君みたいな人間にはやれないよ」

その言葉に少女は、いつもどおり唇をかみしめると、きつと強い目線で木を見上げた。そして、私に背を向け走っていった。

あの橙色の実を食べると、この世の苦しみから解放される。

人間たちの間にそんな噂が広まったのは、いつからのことだろう。今まで数えきれないほどの人間がここを訪れ、実をゆずってくれと頼みにきた。

私は決してその頼みを受け入れなかった。

私の役目は神に与えられた仕事をこなすことであり、今の仕事はこの橙色の実を守ることだ。

借金を背負い、明日の暮らしにも困っていた男。

恋人を事故で失った若い女。

自殺を何度も繰り返し、人生に悲観していた若者。

たくさんのお金が救いを求めて、やってきた。そのすべてに私はノーと言いつづけた。

少女は次の日にもやってきた。

予想できていたことだし、たいして驚きもしなかったが、倦怠感はずきまよった。

「その実、ちようだい」

「だめだよ」

私は昨日と同じように、だが若干うんざりした感じで答える。どうせ、すぐ帰っていくのだろう。

そう思っ、少女を見ると、いつもの勝気な顔はどこへやら、今にも泣き出しそうな顔をしていたので、私はきよつとして身を引いた。少女は私のそんな様子に気づいてか、ぎゅつと唇を引きむすぶと、顔を見せないようにうつむいた。

「……私のおかあさん、病気のな」  
絞り出すような声だった。そして、そのままぐるりと背を向けると駆けていった。

私はその背中をじつと見つめた。

少女はあきらめるだろうか。それとも――

そして、それから三日後のことだった。

私が少し木を離れた一瞬。

がさりと物音がして私のはつとしたように振り向くと、少女が走り去っていくのが見えた。その両手には、橙色の実が三つほどしっかりと抱えられていた。

ああ。

私の嘆きは声にならずにのどの奥でかき消える。

こうして、何人の人間が実を盗んでいっただろう。

救いが訪れることを信じて疑わずに。

罪の意識を感じながら、一方で実を手にした高揚感をたずさえて。

私は自分の両手で顔をおおう。

彼らは知らないのだ。

この世の苦しみから解放されるということの意味を。

それがなにを示すのかということ。

かつて、神は知恵をさずける実を作ったと同時に知恵を奪う実を作った。その実を神は地上のどこかに隠した。一人の守人にその木を守らせて……。

私は背後の木を見上げる。

あの少女は、実を食べた母親の姿を見てなにを思っただろう。

泣き崩れるのだろうか。

それとも、自分自身の口にもその実を運ぶのだろうか。

……どちらも見飽きた。

私は盗人たちの最後を何度も見てきた。

願うなら、そのどちらでもない最後を少女が選ぶこと。

結局、神はどこかで人間を嘲笑っているのかもしれない。あるいは嘆いているのかも。

知恵の実を盗んだころから、変わっていない人間というものを。

だから、神は私に盗人は見逃してかまわない、と言っ。いつか、人間がおのれの愚かさに気づいて、実を請い願ひ、奪い取ることをやめることを願って……。

私の心の声に答えるように、木がざわめく。

私はいつもどおり、木の根元に座り込むと、やがてまた訪れるであろう人間を待ちはじめた……

## 未完のSF

私達が探検する惑星ヨカンは、その特徴から『宇宙の橙』と呼ばれている。地表の大部分はオレンジ色の大気に覆われ、大気の少ない極地方にグリーンの大地が見える。鏡毛チの上に置きたくなる**橙**、よく熟した**橙**、それがヨカんだ。ヨカン探索のメンバーは瀬戸カイ隊長に天草ツブ副隊長、ルー、ヨミ、そして私こと力ザの五人だけである。まず宇宙船に積んだスコープで地表を調査すれば、サバンナと森が大部分を占めていて、樹木は水分をふんだんに含んだ果実をさげていた。その後無事に着陸し、ひとまず休息することにした。

地球時間で翌日、探索を開始。全員は出発せず、ルーのみ船内に残して宇宙船を出た。ヨカンには奇妙な動物が生息しており、ツブ副隊長がサンプルを採取していた。奇妙な動物とは、例えばカブトムシにアメイバを足したような生物や、サザエを背負ったアシカ、目の前をぞろぞろと、跳ねるように歩き回る香りほぼココナッツな向日葵、ボラの頭のボタンエビなどがある。不気味だけどなんとなくユーモラスだ。分析すると、これらの生物はDNAをそなえており、体の構造も地球の生命に近いことがわかった。カイ隊長の命令でその日の野外調査は終了。翌日以降も生物のほか大気や地殻の成分の分析を行った。

着陸から九日後、一番過密なスケジュールだったカイ隊長は倒れた。隊員達にも疲れがたまっていると判断し、ツブ副隊長の命令によつてその日は休息をとることになった。ここまでの調査は順調であり、翌日さらに調査を行えば予定よりだいぶ早く帰還できる状況だった。だが、危うく私も過労で倒れるところだったようで、横になってようやく自分の疲れが自覚出来た。たまった疲れは気が着かないから**たち**が悪いのである。

翌日、本来ならば私が船内に残るのだが、疲れた顔をしていたヨミに譲つてその日の調査を開始した。予定されていた調査はこの日を持って終了したのだが、帰還することは出来なかった。宇宙船に戻ったときヨミは姿を消していたのだ。いつまでたってもヨミは帰って来ない。仕方が無いのだ。

では、ここで問題です。

このページに柑橘類は何種類あるでしょうか？

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
01	でんきゅう	まじょコメント 3 pt   6 位   0 sp		
<p>あかりのあたたかさ。ひとりごと部分のホンネトークで、ずっと伝わってきます。</p> <p>おやすみ気分の今週の表紙でした。なるほどお実話かあふうん。</p> <p>イチオシフレーズ：「なにニヤニヤしてるのよ。」</p>				
02	空戦って格好良いよね	11 pt   2 位   1 sp		
<p>うう、読むのに時間かかる。書き込み、すごいんだけど。特にバレルロールとか。</p> <p>そして、ラストのリクツなんかどうでもいい、っていうセリフが、オレはただ空戦書きたいだけなんだ、という作者さんの気持ちとシンクロして、フシギに納得の力作でした。</p> <p>そうそう、TAさんたちは、この作品、すかいくろらって呼んでたなあ。そんなこんなの2位、おめでとう！</p> <p>特別賞：マニアックで賞 by D (かお)班(航空用語が多すぎる！)</p>				
03	思いは東海道線に乗せて！	0 pt   8 位   1 sp		
<p>だから、思いは東海道線降りてからじゃないの？ とラストにツッコミ。</p> <p>まあ、鉄道好きはしっかり伝わってきましたし、根府川とか、いきなりピンポイントに濃いのも楽しかったし、よろしいのでは。</p> <p>でも、恋愛の甘さは、まだまだだなあ。実体験、積んでくださいな。</p> <p>特別賞：力込めすぎでしょう by Fruit班(名前すけてるよ！)</p>				
		10 pt   5 位   1 sp		

04	ガラスの少年	<p>夕陽+みかん+ガラス=酸っぱい。一瞬のシーンの見せ方がすばらしいです。</p> <p>たしかに、ノスタルジーって、こんな色合いかも。実話ならではのインパクトがしっかり反映されてました。</p> <p>特別賞：冷凍みかん賞 by H 東工大生班</p>
05	The Clockwork Orange	<p style="text-align: right;">0 pt   8 位   0 sp</p> <p>おお、なかなか聞かせる奥の深いトークです。なるほど、夕陽に叫ぶって、そんな衝動だったのかと納得しかけたり。</p> <p>こういうのって、ぐだぐだトークになるのがお約束なのに、しっかりラストでまとめてみせたところも華麗。</p> <p>イチオシフレーズ：「フライングスパゲッティモンスター様がそうお決めになったのです」</p>
06	代々怠惰な橙のタイタンの話	<p style="text-align: right;">11 pt   2 位   1 sp</p> <p>じゅげむじゅげむ。何ですか長い名前フェチですかそうですね作者さんでした。</p> <p>この長い名前を作ったところで勝負アリですね。アイデアはシンプルなのに、なぜか語感が笑えます。</p> <p>同点2位、そしてイチオシフレーズダントツ首位、でした。おめでとう！</p> <p>特別賞：限界を越えているで賞 by Apple班</p> <p>イチオシフレーズ：「代々大胆にも怠惰で(以下略)」×4 「ハーデスが死んで帰ってきて言った」「わしのことかの！ゼウスのひよっこ！」「タイタン」</p>
07	Well-Intentioned	<p style="text-align: right;">0 pt   8 位   1 sp</p> <p>タイトル、むずいよ～。悪気はなかったのに、ってところでしょいか。</p> <p>オレンジあふれるなか、白い桜の凜々しさが際立ちました。ラストのシーンがほんとにきれい。</p> <p>でも、「こらあ、また、殺したなあっ！」</p> <p>特別賞：木登り賞 by E Mikan班</p>

08	橙に染まる	<p style="text-align: right;">2 pt   7 位   2 sp</p> <p>わーわーわー。読んでるほうが恥ずかしい。いや、恋愛モノは照れてちゃ書けないのですよ、おのおのがた。  一輝くんの一生は、こうやって、あんまん一個で決まってしまうましたとさ、めでたしめでたし。  特別賞：こんなデートがしたいで賞 by Choco banana班(萌えた)  現実を見ま賞 by みかんがGreen班(恥ずかしいぜ流石にw)</p>
09	蜜柑	<p style="text-align: right;">0 pt   8 位   0 sp</p> <p>いつもそこには、み・か・ん。ほっこり度、満点の仕上がり。未来形のラストも、読者の気持ちをうまく誘ってくれます。あたたかな佳品でした。</p>
10	橙色の実	<p style="text-align: right;">12 pt   1 位   0 sp</p> <p>知恵を授ける実、奪う実。その対比があざやかで、人の業(ごう)ということ強く思いました。  守られているから奪いたくなる。禁じられているから犯したくなる。寓話仕立てのきれいな影絵越しに、しっかり哲学の芯が通っているところが、この作者さんの凄腕であり、魅力でもあり、ですね。みかんまみれの下界のおおさわぎをよそに、みごとに金メダルをさらいました、おめでとう!!</p>
11	未完のSF	<p style="text-align: right;">11 pt   2 位   3 sp</p> <p>タイトルまで柑橘まみれにしゃがって、このヤロー。  はい、なつみかん、と、セミノールに感動しました。いろんなワザをお持ちあるね。ぐれいと！  二位の尼&amp;咲いた特別賞、あるね。慶祝慶祝。  特別賞：橙賞 by Base ball班(出題班) 未完で賞 by MIKAN班(あまりに衝撃的) すっぱいフルーツ(SF)賞(うまくはまった!!) by Jack-o'-lantern班  イチオシフレーズ：「ぐれーぷふるーツ」</p>